Love fever

みーしゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L o v e f e v e r

【Nコード】

N 4 4 5 8 S

【作者名】

みーしゃん

【あらすじ】

ある日蘭が熱をだしてしまい学校を休んだ

蘭を心配している新一はクラスのみんなにからかわれる

放課後、蘭に逢いに行った新一は・・・

新蘭です！

熱

「あれ、今日蘭はあ？」

「ああ、なんか風邪で休むらしいぜ」

「まじい！？あーあ今日つまんないじゃない・」

たしかに・蘭がいねーとつまんねーな
帰りちょっと寄るか

なんか買っていったほうがいい・って

ジー

「・なんだよ園子」

園子はニヤニヤ新一をみていた

「な〜に新一くん？愛しの妻がなくて、さ・び・し・い！って顔してるわよ〜！」

「うっ〃うるせー！！んな顔してねーよっ！！〃」

「してたわよ！」

まあ今日はわたしが蘭のかわりに他の女と浮気しないか見張ってるからねー！」

「・・・は？心配すんな、蘭以外の女は全然興味ねーから」

「あら！！ノロケてんじゃないわよ！！！」

「うるせー！蘭以外にいい女いねーんだよー！」

「なに言ってるのよ！ここにいい女いるじゃない！」

園子は自分を指さして言った

「・・・は？どこにいんだよ」

新一はワザと辺りを見渡した

「だーから！！わたしよ！！鈴木園子様よ！！」

やっぱ言うと思ったよ

ハハハ（苦笑）

「ちょっと聞「なあ園子、こんな言葉知ってるか？」

新一は園子の右肩に左手を置いた

「ん？なによ？」

「. . .」

寝言は寝て言え」

イラッ

「フンッ！いいわよ！！わたしには真さんっていうカッコイイ彼氏がいるんだから！真さぁーん」

園子は嵐のように去って行った

「ハア. . . やつと静かになっただぜ」

つか何買っていけばいいかわからねー

けど、行くからにはなんか買ってたほうがいいよな

・

蘭 side

その頃蘭はベッドの上にいた

「コホツコホツ！　・　ハア、せきつらいなあ　・　」

ピピピピ

「んーと　・　38・5　か　・　コホツゴホツ、お父さん仕事行くつて言つてたつけ　・　今日1人かあ」

なんか久しぶりに1人になったな

新一の行方がわからなかった頃はいつも私のそばにはコナン君が　・　つて

・　・　結局コナン君は新一だったんだけどね

>>もつどこにも行かない、ずっと蘭のそばにいる<<

前、新一にこんなこと言われたっけ

「コホゴホツ・・・もう寝よ」

新一、あいたいよ

蘭 side 終わり

...

新一 side

蘭、アイツちゃんと寝てっか・・・って

ったく、俺どんだけ蘭のことばかり考えてんだよ

新一は一日ずっと蘭のことばかり考えていた

「ハア・・・情けねえ」

「おい工藤！毛利がいるぞ！」

新一の友達の中道は指をさして叫んだ

ガタッ！

「なっ！アイツ来たのかよ!?!」

新一は指の方向に目をやった

しかし蘭の姿はなかった

「うっそーん！あら工藤くんそんなに毛利が恋しいのん？ニヤ」

「ーっ！」にやろう中道・てめえふざけんなー！」

「工藤冗談じょうだ・ってちよっ！おい工藤やめろー！！」

新一は中道を追いかけた

「ちよっとお！危ないわよーっ」

周りの女子が騒ぎ始めた

「ハア・情けない、蘭にこの姿みせたいわ」

園子は1人でため息をついていた

・・・

「じゃあ今日の放課後は文化祭委員だけ残るよつにー！その他は気を付けて帰れ！」

- 放課後 -

「よしっ・・・やっと帰れるぜ！」

「帰るんじゃないかなくて行くんでしょ？」

また園子はニヤニヤしていた

「＼園子てめえ・・・ったりめーだろ！」

新一は走っていった

「ハア・・・アイツわ蘭がいないと生きていけないわね」

園子はため息をついた

「さあて、わたしもそろそろ部活いこつかな」

「ねえ園子！ちよつといい？」

今年のクラスの文化祭委員のハルカが園子に話しかけた

「ん、何？．．つて確かハルカつて文化祭委員だったよね？今年のウチらなにやるか決まった？」

「そのことなんだけど、今年はカフェやることに決まったの．．で、悪いんだけど園子の家にいらなくなった衣装とかない？」

「衣装つて．．まさかメイドカフェでもやるつもり？」

「そんなんじゃないわよ！ただ衣装あつたほつがそれっぽいじゃない？あと男子の衣装もあるかな？」

「へえ、多分あるわよ！任せなさい！んじゃ、頑張つて！」

「ありがとうー！ばいばいー！」

・この文化祭でまさかあんなことが起こるなんて誰も予想がつか
なかつた

.....

蘭 side

「んー．．よく寝たあ、喉かわいっコホッコホッ．．ハア．．っら
いなあ」

もう夕方か．．
なんか早いな

「明日は学校行けるかな？」

新一ご飯大丈夫かな

ガチャ

「え？」

「よお蘭！具合大丈夫か？」

「しっ！しんいコホッコホッ！」

「その様子じゃまだ大丈夫じゃねーな、スポーツドリンク買ってき
たぞ。」

「あ・コホッありがと・・・」

まさか、心配して来てくれたの？

「ったく、おじさんは？」

「お父さんなら仕事だよ、夜には帰って来るって」

「じゃあ心配ないな」

「うん・・・コホッゴホ・・・ふう」

あんまり心配かけたくないのに、せきがでちゃうよ

「せき、つらいのか？」

「え？・・・ううん、大丈夫だよ！」

わたしはこれ以上新一が心配しないように笑って言った

しかし新一は眉をしかめて

「無理すんなよ、つらいときはつらいって言っていいんだぞ?」

どうやら新一はわたしが無理をしてることがわかったみたい

・まったく、自分には鈍感なくせにわたしと事件には鋭いんだから

「だいじょゴホコホッ．．ぶだよ」

「．．蘭」

「え．．」

新一は蘭を抱きしめた

「!．．〃風邪．．うつつちやうつよ?」

「蘭の風邪だったら大丈夫むしろ大歓迎」

「．．ばか」

相変わらずキザなんだから

「しかもこっちのほうがあったけーだろ？」

「うん」．．新一、のどかわいた

「あ？．．ん、わかった」

新一は買ってきたスポーツドリンクを蘭に口移しであげた

「あ．．ふ．．ん．．ゴクン」

「飲めたか？」

「．．うん」っん．．しんい．．」

新一は再び蘭にキスをした

「ふぁ．．＼いきなりなんでキスするのよ！＼」

「知ってるか？」

キスすると、せきが止まるらしいぜ？」

「えっ？嘘．．」

「まじ、ちゃんと止まってんじゃん」

そつえば、せきが止まってる．．

蘭は一人で納得していた

「クッ」

「え？」

「フハハハ！おまえ信じんなよ！んな訳ねーじゃん！ハハハ！」

新一は爆笑していた

「えっ！嘘なの！？．．新一さいつてーっ！もう知らない！」

蘭は新一から顔をそらした

「んな怒んなって！ハハハ！」

「ーっ〃そんなに笑うことないじゃなっコホゴホッ！」

「．．大丈夫か？」

新一は蘭の背中をさすった

「はあ．．平気」

「もう大人しく寝てろ、な？」

「うん．．ねえ新一」

今日だけ、もう少しわたしのわがまま聞いて

蘭side

.....

新 side

つたく、こいつはいつも人に弱音を吐かない

なんでも1人で抱え込むんだよな

けどな、蘭

いくら嘘ついて平気そうにしても、俺にはわかるぜ？

泣きたいときには泣いて、笑いたいときには笑って、不安な時には俺にぶつけてくれ

俺が受けとめるから、なにがあっても俺はお前の味方だからな

けど、たまには蘭の口から本当のことを俺に言えよ

まあ、本当のことを言わないのはお互い様なんだけどな

.....

「うん．．ねえ新一」

「あん？」

「帰っちゃおうの？」

蘭は捨てられた子犬のような目で新一をみていた

「んな目で見るなよ」

この目には弱えーんだよ！！！！

「だつてえ．．」

「おまえが寝るまでいてやるよ！」

ハア、どうして俺はこんなに蘭に弱いんだ

「やったあ！！ありがとう新一！！！」

「ったく．．．は？」

新一は啞然とした

なぜならさっきまで起きていた蘭が・

・すでに寝ていた

「スー・」

「まじかよ．．．っとに「イツは」

寝るのはえーよ．．．

ジー

蘭．．．可愛いな．．．

「スー．．．」

「っておれ何考えてんだ！

「＼＼たたく、カワイー寝顔しやがって、あんまり無防備で他の男近
付けんじゃねーぞ？」

新一は最後に蘭のほっぺにキスをして部屋をでた

危険

蘭 side

次の日蘭はすっかり元気になっていた

そしていつも通り蘭は新一の家に迎えに行ったが新一はベッドでまだ寝ていた

「新一、朝だよ！起きて！」

新一は全然起きる気配がなかった

「ハア．．．また夜中まで推理小説を読んだのかな？」

しかし、まだ眠いとしてももう起きなくてはならなかった

「もう！推理オタクなんだからーって、ちょっと！」

蘭はいきなり腕を掴まれてベッドに押し倒された

「だーれが推理オタクだって？昨日看病してあげたのはどこの誰だよ」

「しっ新一っ！！本当は最初から起きてたんでしょ！！！！いつから起きてたの！？」

「ああ、蘭が家に入って来てから」

「最初からじゃない！！なんで寝たふりしてたのよ？」

「んー．．」

「？．．」

新一は蘭の耳元でつぶやいた

「．．．蘭が可愛いから」

ドキッ

「なななななっ！！」

E
N
D

危険（後書き）

この後どうなったかは想像におまかせしますが・

いきすぎましたか？・・・；

でわでわ（・・）ノ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4458s/>

Love fever

2011年10月8日20時43分発行